

## 性空上人説話：『撰集抄』を中心として

著者	安田 孝子
雑誌名	梶山国文学
号	7
ページ	15-50
発行年	1983
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1454/00001636/">http://id.nii.ac.jp/1454/00001636/</a>

## 性空上人説話

——『撰集抄』を中心として——

安 田 孝 子

『撰集抄』における性空上人説話（卷六―第一〇話〔58〕<sup>（注1）</sup>）は、(1)硯破<sup>すずりわり</sup>の話 (2)生身の普賢菩薩を拝む話 (3)説話評論の三部から成る。

西尾光一氏によって指摘<sup>（注2）</sup>されている如く、『撰集抄』には歴史的事実とは必ずしも一致しない、いわば虚構的な面白さを持った説話もいくつか所収されている。この性空上人説話をして卷八―第二〇話〔95〕なども、その方向に添って作り上げられた代表的な説話ではなからうかと以前から考えていたので、今回は、性空上人説話をとりあげ、説話伝承の諸相から『撰集抄』の説話の変化してゆく姿、その他諸説話との比較において気づいた点を述べたい。

性空上人説話に関しては、林雅彦氏に、次のご論考がある。

(a) 性空上人をめぐる説話 説話文学研究 第三号（昭和44・6）

(b) 中世における性空上人説話について 中世文学 第一七号（昭和47・5）

(c) 性空上人攷覚書 —— 書写山と帰依渴仰の人々 —— 学習院女子短期大学紀要 第一一号（昭和48・12）

また、特に「硯破」については、

(d) 近古小説硯破すずりわりの成立に関する一考察 附、撰集抄略本の作成年代について

小林忠雄 国語国文 二五卷四号(昭和31・4)

の論があり、室町時代物語「硯破」の本文あるいは解説などは、次に示す書に記載されているので、それによって内容を知ることができる。

① 墨水遺稿 卷之一 黒川春村遺稿(黒川真道校訂)

「すずりわり物語」の項 (明治32・7)

② 室町時代小説集 平出鏗二郎編校訂

解題「三」「硯破」 精華書院 (明治41・1)

③ 近古小説解題 平出鏗二郎

「硯破」の項 大日本図書(明治42・10)

④ 新編室町時代小説集 横山 重 (昭和18・12)

⑤ 硯破絵巻その他 梅津 次郎

——小絵の問題——

「国華」第七十編 第三冊 828号(昭和36・3) (『絵巻物叢誌』法蔵館 昭和47・2所収)

⑥ 室町時代物語大成 卷七 横山重・松本隆信編 角川書店(昭和54・2)

「硯破」加藤隆文氏蔵奈良絵本・内閣文庫蔵写本・広島大学蔵奈良絵本

右のうち本文も翻刻されているのは、②④⑤⑥である。②と⑥の内閣文庫蔵本の本文は、ごく一部の漢字・仮名の

相違がみられるものの、ほぼ同じであるから、同系統もしくは同一写本で、単に翻字の際起きた誤りかも知れない。  
以上、先学のご論考、翻刻に導びかれながら、そして私共作成の『撰集抄 校本篇』（笠間書院）を本文比較の資料として用い、種々考察を加えたい。なお、本稿において依拠した本文は、『文献一覧』としてまとめて最後に示した。

『撰集抄』の巻六には、他の巻々よりも比較的長い話が多く、巻六の第一話にしても第二話にしても、二つ以上の話を寄せて一説話を作り上げたという印象を持つ。同じ巻の第一〇話性空上人説話も長い話で、書陵部本においては、この一説話に対して、

書写聖人事

生身普賢菩薩事

という二題目を目録に掲げている程である。

説話内容も豊かで、前述の如く「硯破」「生身普賢菩薩」「説話評論」の三部構成となり、話としても妙味ある物語的展開をなす。主家の秘室―硯をあやまって破ってしまい、身代りに世を去った若君の菩提を弔うため出家するというその動機、俗世を離れた後の仏道精進、心を澄して遂に大根清浄を得、生身の普賢菩薩を拝むことが出来るに至った性空上人の生きざまは、「清僧」を意識する『撰集抄』作者の好む姿であった。

室町時代には、前述の「硯破」物語・絵巻・奈良絵本など出現し、江戸時代には、司馬江漢が、彼の随筆『春波楼筆記』<sup>(注3)</sup>に『撰集抄』からこの話を引用し、明治に及んでは、山田美妙が、小説『性空上人』<sup>(注4)</sup>を書き上げた。現代の我々にとっても、巻六―第一〇話は、『撰集抄』の諸説話中、面白く読み得る一説話である。

そこで、性空上人に関する記述を出来得る限り多くの書物からとりあげてみることにし、内容を分析すると、次のように大きく整理することができる。

- I 伝記（出自・おいたち・修行の様子など）
- II 碑破
- III 生身普賢
- IV III以外の各種逸話
- V 説話評論（評語・賛その他）

右の如く大きく分けてその内容の有無を示したのが資料一「性空上人説話一覧」である。

#### 資料一

- (1) ○印は、見出しの記事を所載していることを示す。
- (2) △空欄は、見出しの記事が所載されていないことを示す。
- (3) ×印は、記事のないことを強調したいことを示す。
- (4) △印は、見出しの記事が不完全ながら記されていることを示す。
- (5) ※「くらきより」の歌に関しては、『拾遺和歌集』『和泉式部集』をはじめ多くの書に引用されているので、性空上人が歌の返しに袈裟を贈ったという説話に限った。
- (6) 成立年代は、主として『日本文学年表』（市古貞次編 桜楓社）『大日本仏教全書 解題』『群書解題』などに依った。



『撰集抄』においては、性空上人のいわゆる伝記的な叙述はなく、ⅡⅢⅣのみを含む。「硯破」「生身普賢」の二要素は、恐らく元来別々に存在したものが、何時の時点からか、性空上人を軸に見事に統合され、それに『撰集抄』作者独自の「批評」も附加されて、有機的な構成のもとに興味ある説話へと変容したものであらうと考えられる。その統合の役を担ったのは、果して『撰集抄』作者であるのか否か、問題となるところである。「硯破」「生身普賢」「説話評論」の三部分を順に検討する。

## 一 硯 破 説 話

「硯破」事件を記載するのは、次のものである。資料一を参照していただきたい。

(1) 今昔物語集 卷一九―第九話

(2) 撰集抄 卷六―第一〇話

(3) 室町時代物語 硯破（後に示す四系統）

近世以降のものでは、

(4) 春波楼筆記（司馬江漢）

(5) 性空上人（山田美妙）

(1)(2)(3)について、次に概略説明する。

(1)「硯破」説話を所収する説話集のうち、最も古いものは、『今昔物語集』であるが、しかし、卷一九―第九話「依小児破硯侍出家語」の場合は、性空上人とは全く関係がない。「ある男」（侍）が主人公であって、性空上人と

は何のかわりもない話として存在する。代りに罪をかぶった若君が、乳母の家へ追いやられ、そこで病死するという事件の結末は、首をきられた『撰集抄』『硯破』(i)内閣文庫蔵本・(ii)加藤隆文氏蔵本)などとも異なる。同じ『今昔物語集』の巻一二―第三四話「書写山性空聖人語」に収められた説話は、出自・おいたち・出家・書写入山・入滅に至るまでのいわば上人の伝記が書かれているが、ここには硯破事件の記載は全くなく、出家動機も幼い頃から仏道への志が深かったからとし、「硯破」事件によって出家した『撰集抄』以降の作品とも異なる。また、生身の普賢菩薩を拝んだ話も見当らない。即ち、『今昔物語集』においては、巻一二―第三四話に性空上人の伝、巻一九―第九話に「ある男」(侍)を主人公とする「硯破」の話を書き、相互には全然関係のない各々独自の話として所載されているのである。

(2)次に『撰集抄』の巻六―第一〇話〔58〕「性空上人事」には、「硯破」事件によって発心した仲太が、性空上人と呼ばれ、六根清浄を得て、遊女の姿となって化現した普賢菩薩を見通す程の力を持つに至るいきさつが記される。このように「硯破」と「生身普賢」の話が、性空上人という一人物の俗世時代と遁世時代の事として有機的連結のもとに記述されるのは、『撰集抄』以前の作品には見当らない。

「出家」「遁世」は、いわば人生の節目であり、人はそうした人生の曲折点に関心を寄せ、それだけにその説話の話題性も大きい。『今昔物語集』巻一二―第三四話の如く、生れ出るより奇特をなす一男子が、当然のなりゆきで出家するという筋運びよりも、主家の家宝の硯を破った咎により、代りに若君が打首の罰を蒙ってしまい、それが動機となって発心する話の方が、いかにも波乱に富んで面白い。このように二要素を繋いだのは、一体『撰集抄』作者のなすわざか否か。

(3)室町時代物語『硯破』は、現在四系統知られている。



- (i) 内閣文庫蔵写本（一冊）・実践女子大学図書館蔵写本（一冊）<sup>(註5)</sup>・名古屋大学文学部蔵写本（一冊）<sup>(註6)</sup>
- (ii) 加藤隆文氏蔵奈良絵本（三冊）
- (iii) 広島大学国文学研究室蔵奈良絵本（三冊）
- (iv) 小絵巻（明応四年十一月廿九日 源義高奥書本）

右四系統の本文は、<sup>(註7)</sup>それぞれ大きな異同がある。そこで、「硯破」四系統諸本の概略を述べ、特に気づいた異同は、注に記すこととする。

(i) 内閣文庫蔵本 写本一冊<sup>(註8)</sup>

性空上人の発心の由来を、「硯破」事件によるものとして筆を進めていく点では、表現に大きな差があるものの、『撰集抄』と変らない。若君死後の母・乳母の、嘆き・出家・隱棲・往生、父大納言の抖擻行脚・往生——といった大納言一家の後日譚は、『撰集抄』にはない。中太も出家し、示現を得て書写山に至り、数々の奇特をあらわすが、これも『撰集抄』には見当たらない。最後に「生身普賢」説話となり、入滅記事のあと自分の考えを加えて終る。

(ii) 加藤隆文氏蔵奈良絵本三冊<sup>(註9)</sup>

ちうた三郎（後の性空上人）の出自・おいたちから書き起す。こうした伝記的部分の書き加えは、『性空上人伝』『大日本国法華経験記』『今昔物語集』（巻一二―第三四話）といった、いわゆる性空上人伝記の系統の上に立つ資料をふまえていると考えられる。

単に、そっと硯を一人で見ると見る『今昔物語集』、若君を「すかしこしらへ」と表現する『撰集抄』、『硯破』（i）内閣文庫蔵本）と異なり、「御いへの、てうほうのすかたを、いままで、ひとめも、おかみたてまつらぬ事のよその聞

えも、くちおしく侍るなり」(P. 616)と若君に頼んで硯をみせてもらう点、あるいは、書写山にて修行すべしとの示現を蒙って、修行先の筑前から書写山に海路向う時の描写などにも創作性がみとめられる。若君死後の、母の子を思う嘆きを記述する際、唐の例話を挿入、同様の手法で、あちこちに天竺の話、昔の話、増賀上人の話、種々の奇瑞譚を巧みに加えて、一つの物語を形成している。「生身普賢」の話、そして諸人が性空に帰依する話を述べ、入滅記事の後自分の考えを加えて終る。

分量の上からも(i)より多く、それだけ物語風にふくらんで、「読みもの」へと変化している。

(iii) 広島大学国文学研究室蔵奈良絵本三冊

(ii)に一層獨創性・物語性を加味した形が、この『硯破』である。先の(i)(ii)は、分量、内容の差こそあれ、一応『撰集抄』の持つ二要素を含んでいたが、この広島大学蔵本には、「生身普賢」を拝む話はもうない。硯破部分にしても、主家の若君は、長谷寺に祈りやと授った大事な子であるとして描き、その死に一層悲しみを増すという伏線を敷く。そしてついながら長谷寺の由来を述べ、文にふくらみを持たせる。硯を見る場面も、二人の会話形態の文によってその行為の重大さを感じさせたり、硯が破れる以前、父大納言が悪夢を見ているなど、事件発生を思わせる事柄が既に記されているのである。あるいは、若君を殺す直前も、朝廷で言い争いがあり、ひどく機嫌を損じて帰宅したところ、秘宝の硯が割れていたとし、怒りを一層強調するように文が用意されているのである。説話を下敷にしながらも、はや説話の寄せ集めではなくて、(i)(ii)よりもさらに大きく進んで、別の物語へと成長していく姿である。

仲太は出家、名を「しんかい」という。「性空」としないあたりも虚構化が進んでいるといえる。母・乳母の出家、父大納言の出家を語る間に、若君の妹(i)(ii)には登場しない)にあたる姫君一家の叙述に筆は走り、(i)(ii)には見られなかった大納言一族の描写へと展開する。しんかいの諸国遊行の先々の名所についても、数々あげて、紀行的要

素も盛り込み、やがて摂津国「たゝの里」(多田)に落ち着く。「性空」とせず「しんかい」に変えた以上、書写山入山という訳にはいかない。母・乳母、父共に出家する点では(i)と類似する。子孫の繁栄を記述し、「目出度こそおはしましけれ」と「めでたしめでたし」で完結する方法は、まさにお伽草子特有の構成をとっている。

(iv) 小絵巻 明応四年十一月廿九日 源義高奥書本  
(二四九五)

詞書三段、絵三箇所。詞書の本文も極めて簡略化されている。「中道」という侍が、硯破事件によって出家して書写山に登り、若君の後世を弔う。侍の名は『撰集抄』と異なる。若君の罰せられ方は、『今昔物語集』卷一九―第九話に似る。

以上、『硯破』四系統の本文のうち、『撰集抄』の硯破部分と重なるところだけ比較すると、次のことが言える。

☆印は、『撰集抄』と一致するものである。

1 在俗時代の主人公の名  
☆(i) (ii) 中太三郎 ちうた

(iii) 仲太の三郎よしひさ

(iv) 中道

2 出家後の名

☆(i) (ii) 性空

(iii) しんかい

(iv) 記述なし

3 修行最後の地

☆(i)(ii)(iv) 書写山(播磨)

(iii) ただの里(撰津多田)

4 主家の主人の名

☆(ii)(iii) ときとも

(i) 朝時(「時朝」の誤写か)

(『今昔物語集』は「小一条左大臣師尹」)

5 硯破事件の時の若君の年令

☆(i)(ii) 十才

(iii) 八才

(iv) 七才

(『今昔物語集』は、十三才)

6 若君を罰する方法

☆(i)(ii) 首を斬る

(iii) 殺す

(iv) 乳母をつけて嵯峨の小家へ追いやる。そして死ぬ。

(『今昔物語集』は、乳母の家へ追いやる。病死)

右の他、

○主人公、中太三郎の出自・おいたち(資料一・I)を比較的詳しく記すもの(ii)のみ

〔『今昔物語集』巻二—三四もIを記す〕

○「硯破」（資料一・Ⅰ）と「生身普賢」（資料一・Ⅲ）の二要素を含むもの ☆(i)(ii)のみ

○若君の死後 主人公出家 四系統共に同じ。

両親・乳母出家 (i)(iii)

〔『今昔物語集』巻一九—九は、父母共に出家しない〕

以上、(1)『今昔物語集』、(2)『撰集抄』、(3)『硯破』 (i) (iv)の本文検討を通して『撰集抄』を見返すと、『今昔物語集』に単独で所収された硯破説話、そして、『古事談』『十訓抄』などに載せられる「生身普賢」説話（後述）が、直接影響の有無は別として、両要素融合して形成されていることがわかる。二つの事柄が、「発心の由来」という因果関係で結ばれている点、単なる話の寄せ集めとは異なり、そこには、説話の変化してゆく姿が認められる。しかし、まだまだ物語的な虚構性を持つに至ってはいない。充分説話の素朴な味を残している。

室町時代物語『硯破』に至ると、簡略化された(iv)は今暫らく措くとして、本文比較からは、丁度『撰集抄』↓(i)↓(ii)↓(iii)へと進展していったのではないかと思われるのである。(iii)においては、「生身普賢」の話は削除され、別の形の物語へと変化したのである。今ここで(i)(ii)(iii)と記したのは、現存本そのものの成立順序ではなく、各々のタイプの本文という意である。

以上のように、『撰集抄』説話は、室町時代物語へと昇華し、後半の「生身普賢」の靈驗譚は、それはそれとしてまた別の圏内で生きながらえ、伝承されていくことになる。

## 二 生身普賢菩薩説話

「生身普賢」の話を所収する説話集は、次の通りである。

- (1) 古事談 二九一話「性空、生身ノ普賢菩薩ヲ見ル事」(卷三—九五)
- (2) 十訓抄 第三不<sub>レ</sub>悔<sub>二</sub>人倫<sub>一</sub>事 (一五)
- (3) 撰集抄 卷六—第一〇話〔58〕「性空上人事」
- (4) 私聚百因縁集 卷四—第四話 五官普賢本迹之事付堅陀羅長者  
付神崎長者
- (5) 室町時代物語 硯破(i)内閣文庫本系統写本

(ii) 加藤隆文氏蔵本

- (6) 謡曲江口(「性空」の代りに「西行」とする)
- (7) 鹿苑院殿嚴鳴詣記(「普賢」の代りに「文殊」とする) 康応元年三月十二日条
- (8) 三国伝記(i)板本(注1) 卷一—第六話「江口室之長者事書写性空上人  
拝普賢二事」  
(ii) 平仮名本 卷一四—第五話「性空上人(注1)ふけん菩薩に逢給し事あひ」

(9) 東斎隨筆 仏法類 49

(10) 法華經直談鈔 卷一〇末—二四話「性空江口普賢遇事」

近世のものではない、

(11) 春波樓筆記

(1)『古事談』には、性空上人に関する説話が、この二九一話（卷三一九五）の他、二二〇話（卷三一二四）・二八七話（卷三一九一）・二九二話（卷三一九六）計四箇所にみられる。神崎の遊女である点、比較的「十訓抄」の前半に似る。

(2)『十訓抄』<sup>(一五)</sup>は、『古事談』の二九一話における「生身普賢」の話と、二二〇話「源信・覺運、性空ト問答ノ事」に相当する二つの話がまとめられて一説話を成している。

(3)『撰集抄』は、前述の通り前半が「硯破」（資料一・Ⅱ）、後半「生身普賢」（Ⅲ）、それに「説話評論」（Ⅴ）、が附加されて終る。室町時代物語『硯破』との類似は、後に校合資料によって示す。室の遊女の話とする点では、(1)(2)と異なる。江口・神崎と共に室の遊女も知られ、写書山に近いことから室への転化も考えられなくはない。

(4)『私聚百因縁集』巻四―第四話の付たりの部分に「神崎長者」としてみられる。他に、巻八―第三話「僧質上人ノ事」に、性空上人の偈の一部を記載する。神崎の遊女とする点、(1)(2)に類似。

(5)室町時代物語『硯破』のうち、「生身普賢」の部分を含むものは、(i)内閣文庫蔵本系統の諸本 (ii)加藤隆文氏蔵本のみである。後にあげる資料二によれば、内閣文庫蔵本の方が(ii)よりも『撰集抄』の本文に類似する。特に略本に似ることも明確である。作品全体の比較は、「一、硯破説話」の項で述べた通りの差がある。<sup>(注12)</sup>

(6)謡曲『江口』は、観阿弥（一三三三―一三八四）の作曲、「作詞者も同人である可能性がなくはない」といわれる作品である。『撰集抄』における巻九―第八話（118）「江口遊女事」と、巻六―第一〇話（58）のうちの「生身普賢」に相当するところを素材にしており、従って全て西行の話として展開する。比較が可能な資料三八その二Ⅴに示した部分のみの校合によると、『撰集抄』よりもむしろ『古事談』『十訓抄』の本文に似る。

(7)『鹿苑院殿嚴嶋詣記』は、『足利義満公嚴島詣記』とも呼ばれ、康応元年（一三八九）、今川貞世（了俊）によって

書かれた。同年三月、義満の敵嶋詣に随行した折の旅日記である。十二日の条に「むろづみと云所に至ぬ。むかし生身の文殊のみかほがまむとちかひける人につげ有て、これこそ生身の文殊よとて、此所の遊女ををしへける所ぞかし」と記されるのみであるが、「周防ムロヅミノ中ナルミタラキニ……」(『古事談』『十訓抄』)と歌う歌詞から「むろづみ」(室積)が想起され、また、普賢と同じ釈迦の脇士である文殊へと記憶が変ったものと思われる。

(8)『三国伝記』は、現在、写本・板本・平仮名本が知られているが、この部分、写本は欠本となっている。平仮名本は、一見板本を平仮名化したかに見えるが、類話関係を精査すると板本以外の資料も種々用いていることがわかる。平仮名本の巻一四―第五話(板本巻一一―第六話に相当)も、最初は板本を単に平仮名書きしたに過ぎないような形で始まるが、後に示す資料三の如く、歌の部分だけに限っていうならば、板本は『古事談』風(△印)、平仮名本は、『撰集抄』風(☆印)なのである。平仮名本の場合、普賢の化現である遊女のいる場所は、神崎・江口・室・室積などではなくて、歌枕、摂津国「こやのゝしゆく」(昆陽)となる。(注10)(2)に示した「背振山」から「領巾振山」への変化と同様、歌枕好みの作者の姿勢、虚構化への姿がみられる。『三国伝記』平仮名本は、説話から草子化する過程を示していると思われるが、それは丁度「硯破」にみた説話の成長の仕方と似ている。『三国伝記』には、他に巻八―第二〇話(写本八―二一・平仮名本一一―一七一部落丁)に「性空上人上東門女院相看事」を載せる。

(9)『東斎隨筆』は、『古事談』あるいは『十訓抄』からの直接伝承を考えてよいであろう。

(10)『法華経直談鈔』における、性空上人関係説話は、「生身普賢」を収める巻一〇末―第二四話の他、林氏(前掲論文(b))によって指摘されている通り、巻四本―一八話、巻五末―第七話、巻八末―第二四・二五・二六話などがある。以上、「生身普賢」を載せる諸書をみて来たが、この中、校合可能な類似性を持つものは、(3)と(5)である。(3)『撰集抄』は、松平文庫本と略本(嵯峨本)を用い、(5)『硯破』は、(i)(ii)両本ともとりあげ、資料二として校合本文を示



した。

また、資料三は、その中の一部を類話関係にある書(1)~(10)から抜き出し校合したものである。遊女たちとの遊興の場であらう歌と、そして、その歌が、六根清浄を得た性空上人にはどのような尊い文句に聞こえたかを示す二要素は、おおむねどの書にもとり入れられているので、特にこの部分に限るならば本文比較ができるからである。歌をそれぞれ資料三△その一▽△その二▽とした。

## 資料二『撰集抄』巻六―第一〇話と『硯破』本文の比較

一、略号 松||撰集抄松平文庫本

略||撰集抄嵯峨本

内||硯破内閣文庫本

加||硯わり 加藤隆文氏蔵本

二、『撰集抄』松平文庫本を基本において、その本文と異なるところだけ記してある。

三、空欄は松平文庫本と同じであることを示す。

四、「・」(クロマル)は、その字がないことを示す。

五、『硯破』内閣文庫本と加藤隆文氏蔵本の独自本文のうち、長文に渡るものは、①~⑬に示した。

六、「校本行数」欄に示した算用数字は、『撰集抄 校本篇』の行数である。

七、この校合は、いずれも「生身普賢」部分のみとりあげたものである。

八、使用したテキストは、「文献一覧」14・25・26に示した。



<p>松 暁……のうつゝに天・童・詫・して……………云……………</p>	<p>略 …… 来 り いはく</p>	<p>内 あかつき…………… どうきたり いはくふげんほさつを拝みたく思ひ給はゞ</p>	<p>加 あかつきかたする てんとうきたり・上人につけていはくなんちこゝろさしふかしそのきならはた</p>	<p>3138</p>	<p>松 ……室・の遊・女・か長……者・を拝・め……それ・そ実……の普賢……なる……と示・して</p>	<p>略 むろ おか こ れ しめ</p>	<p>内 むろ ゆふぢよがちやうじや み給へ こ まこと ふげん れ しめ</p>	<p>加 うこくむろ ゆふちよ 長<sup>てう</sup>者<sup>しゃ</sup> おかみ給へか こ まこと ふげんほさつにて侍れ しめ</p>	<p>3140</p>	<p>松 失・給・ぬ……不思議と……思ひ……をとろきていそき室……………へいたり給なんとす</p>	<p>略 うせ ひ 儀に …… むろ</p>	<p>内 うせ ひ 上人ふしぎに 給ひて …… ぎ の長者のもと</p>	<p>加 うせ い ふしきさよとは 給へとも…………… むろ</p>
--------------------------------------	---------------------	--	---	-------------	---	-----------------------	---	---	-------------	---	------------------------	--------------------------------------	------------------------------------

3141																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
松	・黒・	・衣・	・	・	・にては遊・	女・	・見んといはん事・	・悪・	かりなんと・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・</

3146		松		・れり・しる申とて舞をまふ周防・みたらしの沢・部に風の音・信・てとかすふれ・	
略		りて・		の 辺 をとつれ うたへ・	
内		まつりて・		にさはへの をとつれ うたへ・	
加		りけり③・		さはへ をとつれ うたひ出したりけれ	
3147		松		は・・・ならひるたる遊・女・共・同・声・してさゝら浪・立つやれかとつとうと・・・拍・し	
略		居		とも に 波 た ・・・うたひはや	
内		ば		・み ゆふぢよ どう をんに なみた ・・・うたひはや	
加		そのとき		ゆふぢよともおなしこゑ なみた ・ うく はや	
3149		松		けり・・・・・されは是・は生・身・の普賢・・・にこそと思・給・て目をふ	
略				おもひ・	
内				しゃうじん ふげん ひ・ め	
加		此うたをきゝ給ひて上人		これ しゃうしん ふげんほさつ おもひたまふめ	

<p>3150</p>	<p>松 さき心をしつめて・・・・観念をし給ふ時端・厳・柔・和の生・身・の普賢・・・・白・象</p>	<p>略 給へは ・・・・</p>	<p>内 ぎ づ・ 給へは ・・・・たんこんにうわ しやうしん ふげん びやくざ</p>	<p>加 おはしませは・・・・たんごんにうわ しやうじん ふげんほさつはくさ</p>	<p>3152</p>	<p>松 ・に・・・・居給・て法・性・無漏の大海・には普賢・恒・順・の月・光・ほからかなりとう</p>	<p>略 坐し ひ の</p>	<p>内 うざし ・ ほつしやうむろ かい ふげんしやうしゆん の が</p>	<p>加 う座してゐ ひ ほつしやうむろ かい ふげんすい しゆん の ひかり</p>	<p>3154</p>	<p>松 たはせ給へり・又目をあきて是をみ給へは遊・女・の長者・也・うたふ声・もさゝら浪・立・と云・</p>	<p>略 ・ ・ ・ ・ ・ ね ・ なり</p>	<p>内 め ・ ・ ・ ・ ・ なる</p>	<p>加 ④ ・ ・ ・ ・ ・ ゆふちよ しやなり こゑ なみたつ いふ</p>
-------------	--	-----------------------	--	--	-------------	---	---------------------	---	---	-------------	--	---------------------------	-------------------------	---

<p>松也・・・・又目をふさき・・・・心を法界にすませは長者・又・生身の普賢・にてまし／＼</p>	3155	3156
<p>略なり</p>	<p>給へは ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・</p>	<p>・ ・ ・ また・ ・ ・ ふけん まし</p>
<p>内 なりやゝありて上人め</p>	<p>給へは ・ ・ ・ ・ ・ 給ひければ・ ・ ・ ・ ・</p>	<p>しやまた・ ・ ・ ふけん おはしま</p>
3157	<p>松・けり・聖人貴・ ・ ・ 馮・ ・ ・ しくいまして・ ・ ・ ・ ・ いとまを申・て出・給・ふ・程・に</p>	
<p>略 上 たつとくたのも き・ ・ ・ 事かきりなしさて</p>	こひ	
<p>内 上 たつとくたのも 思・ひ給ふ事かきりなし扱・</p>	こひ	ほと
<p>加す・ ・ ⑤上 たつとくたのも おもひ給ふ事かきりなしさて⑥</p>	こい いてたま	⑦・ ・ ・
3158	3159	
<p>松一町・ ・ はかり・去・給・て・ ・ 後・此長者・俄・ ・ に身まかり・ ・ にけり・此長者遊・女・ ・ ・ と</p>		
<p>略 ひ</p>		・ ・ ・
<p>内 行 のち にはか</p>		・ ・ ・ ゆふちよの身
<p>加 ちやう もさり はさるに・</p>	しやにはか	⑧・ ・ ・ ゆふちよの身

		3160	
略	松	をくり	して年・を送・しかとも誰・か・是・を生・身・の普賢・……とは露・思・侍・し只・
内	内	ゝくり	共・たれはこれしやうしんふげんひらたゝ
加	加	月おくり	たれはこれしやうじんふけんほさつとつゆおもひらたゝあ
3161		3162	
略	松	へ	……なめての女とこそ思・ひけめ実・の……菩薩・にてをはしましける事けに／＼忝・
内	内	べ	まことほさつおかたしけ
加	加	けくれはへ	おもまことふけんほさつおありかた
3163		3164	
略	松	たち	……そ侍るすへてかゝる三よの仏達・形・をかくして・うち出給へ共・……眼・に雲あつく
内	内	なく	世たちかたちふにもまなこ
加	加	く	世たちかたち⑨ともほんふのまなこ



[illegible]

<p>3169</p> <p>3170</p>	<p>松 あるにや実・・のあらはれぬ・・とて・さりいまそかりけるやらむ又聖人にをかまれ給・・ぬれ</p>	<p>略</p> <p>去・</p> <p>ん 上 お ひ</p>	<p>内 有・ まこと</p> <p>す・</p> <p>ん 上 お</p>	<p>加 ・・・・・まこと</p> <p>たまはん や・</p> <p>ん 上 お たまふ・</p>	<p>3171</p>	<p>松 は是・やのそみにていまそかりけん・・・・・此ことは拾・遺抄・に・載・・・・て侍る・・・こ</p>	<p>略</p> <p>事・</p> <p>のせ り</p>	<p>内 す</p> <p>しりかたし</p> <p>・・・・・</p>	<p>加 ・これ</p> <p>⑫ 事・ しういしう もかきしるし・ りけり⑬・</p>	<p>3172</p> <p>3173</p>	<p>松 とのみすこしかたさに書のせめるに侍・也・見およはさるにはあらすされは悟・・のまへには風・の</p>	<p>略</p> <p>く</p> <p>るなり・</p> <p>さとり 前・</p>	<p>内 ・・・・・</p> <p>さとり 前・</p>	<p>加 ・・・・・</p> <p>さとり</p> <p>かせ</p>
-------------------------	--	-----------------------------------	--	--	-------------	---	--------------------------------	--------------------------------------	--	-------------------------	--	---	------------------------------	-------------------------------------

3174	松こ糸浪・の音・みな妙・なる御法に侍る事此遊女の歌の法・文・なるにてひしとけに思・ひ定・て	略波	内をとたへ	加なみをといつかのりのこ糸ならすといふ事なししよほうじつさうのことはりいと有かたく	松侍り・	略	内ぬ	加そ侍る	
3175		・・	ほうもん	・・おもさだめ					

①②には、次の文が入る。△以外は加藤本。

①「おもひ、たち給へり。されとも、むろへいたるに」

②「聞ゆるやう、これはいつかたより、御いて候そや、此あたりにては、みなれ申さぬほうしたちにて待ると、申ければ、上人、いつはり給ひて、聞え給ふやうは、われはこれ、さいこくのかたにあり、みやこへのほるものなるか、二三日いせんに此うらにつき待るといへとも、おいてのたよりなくて、つれ／＼に待る。ことさらはる／＼のふなちをへてのほり侍れば、まうき、やみかたさに、いま此所にまいりたりと、聞へさせ給へは、長しや、きゝて、けに／＼さこそおはすらん、さなきたにりよはくは、ことに物うきに、はる／＼なみちをしのきたまふ事、せんちうの御つれ／＼さこそとおもひやられて、いたはしく待るとて、さかつきとり出、ゆふちよあまたさしあつまり」

〕「さかつきのかすもかさなりければ、長しや、きこゆるやう、なに／＼ても御さかなにとて」

④「上人、たつとくありかたよくおほしめして」

⑤「うたふこゑも、またほけきやうの、八のまきなり」

⑥「さてこそわかのそみかなへりと、おもへり。さて、その／＼ち、上人、長しやに」

⑦「長しやも、もんの外までみをくり奉りて、いかさま、此そうは、た／＼人ならずと、ゆふちよともにかたりきかせ侍りしか、いまた上人」

⑧「その／＼ち、しにんの家のうへに、しうんたなひき、れいかう四方にくんしければ、あたりの人／＼立出て、これをみ侍りける、に、雲中にはくさうけして、ふげんほさつ座し給へり。ありかたよく、たつとくて、しよにん、これをはいし奉る。さても」

⑨「わくはうのちにましはり」

⑩「おなしさましたるそう四五人くし給へとも、た／＼上人のみ一人こそ、まことのふげんとはおかみたまへり」

△ 内閣本「此上人の、おはしませすは、誰かはかゝる事をもしらむ」

⑫「返／＼も本かたよく侍るとて、上人、御ともの人／＼もすみそめのそてをしほり給ふばかりなり」

⑬「さ／＼らなみのことはをもつておもへは」

説話集など

(10)法華經直談鈔	江口	△該當箇所ナシ▽
(9)東斎隨筆	神崎	△ サ 吹・波・立・
(8)三国伝記	平坂名本	☆すはうの……るにさはへのかせのをとつれて・
	板本	△室・津海、中、フ吹・浪・立ッ
(7)巖嶋詣記	室積	△ ク ▽
(6)江口	江口	△該当箇所ナシ▽
(5)硯破	加藤本	☆すはうのしのはへに風・のをとつれて・
	内閣本	☆すはうのしにはへの風・のをとつれて・
(4)私聚百因縁集	神前 <small>カンサキ</small>	△法性無漏、大海、……不レ吹……微……浪・立ッ・哉
(3)撰集抄	略本	☆の……しの沢・辺に風・のをとつれて・
	松平本 3145	☆……しの沢・部に風・の音・信・て・
(2)十訓抄	神崎	△吹・浪・
(1)古事談	神崎	△周防・・ムロヅミノ中ナルミタラキニ風ハフカネドモササラナミタツ・
説話集など	遊女	

△その二▽

(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3) 3151	(2)	(1)
△	△	☆法性 むろの	△法性 ノ	△	☆ほっしやうむろの かい	△法性 ノ海	☆法性 の	△	△実・相・無漏之大海・ニ・五塵六欲之風ハ不 <sub>レ</sub> 吹・
ノ	ノ	ふけんしやうちう・の月のひかりほからか也・	ノ・不 <sub>レ</sub> 吹 <sub>モ</sub> ・	の	はふげんじようしゆんの月の光・ほからかなり・	塵 <sub>チ</sub> 欲 <sub>ヨク</sub> ノ	は普賢・恒・順・の月の光・ほからかなり・	ノ	・トモ随縁真如之波・タタヌトキ・ナシ・
ノ	ノ	時・	ノ	ふかね	はふけんすい・しゆんの月のひかりほからかなり・	共・	・の月の光・ほからかなり・	ノ	・タタヌトキ・ナシ・
ノ吹 <sub>ホ</sub>	ノ吹ザレ		ノ立 <sub>タ</sub> ・無 <sub>レ</sub> 間 <sub>マ</sub> ・	の	浪 <sub>ナミ</sub> 無 <sub>レ</sub> 立 <sub>タ</sub> 間 <sub>マ</sub> ・		・	時・	・
ノ波 <sub>ハ</sub> 之立 <sub>タ</sub> ・日 <sub>ヒ</sub> ・无 <sub>シ</sub> ・				の立たぬ日・もなし <sub>(注16)</sub> 立たぬ日もなし					

右表は、一、『古事談』の本文を、基本本文とし、それと異なるところだけ示した。

二、「・」はその字のないことを示す。

三、平仮名・片仮名の相違、清濁の相違などは記さない。

四、△その二√の(1)~(10)は、△その一√と同じ説話集であることを示す。

『撰集抄』前半の「硯破」部分については、かなり異同が大きく校合は困難を極めるが、右の資料二によって、「生身普賢」の部分に関しては、『撰集抄』と『硯破』(i)(ii)とは、校合可能な程度に類似していることがわかる。『硯破』(i)(ii)は、『撰集抄』の諸本中では最も略本に似ていると前述したが、それは、この資料からも証せられる。例えば目立つところをとりあげれば、3133・3139・3145・3150・3153・3155・3159・3163・3169などの三本欠本部分、あるいは、3142・3143・3157などの三本共通異文などは、全て諸本のうち略本のみが『硯破』(i)(ii)に一致する箇所である。『撰集抄』が(ii)(加藤本)にのみ似るところ(3132・3133など)、略本が(i)(内閣本)にのみ似るところ(3137・3148・3175)、(i)(ii)の両者のみが似るところ(3135・3159など)の存在を考えると、『撰集抄』略本系本文を下敷にしながらも、(i)(ii)相互にも関連し合ったか、あるいは3135・3159の如き本文を持った『撰集抄』が存在したかであろう。ともかく、(i)(内閣本)には、それ独自の本文(3132・3133など、および資料二の後の校異△)がない訳ではないが、『撰集抄』との類似度は、(ii)(加藤本)よりはるかに(i)の方が大きい。それは、△を除く①~⑬に示した(ii)(加藤本)の増補文をみてもわかることである。前に述べた「硯破」部分と同様、この「生身普賢」においても、『撰集抄』を下敷にいくらか手を加えて、(i)(内閣本)のタイプのものが出来上った。そして、さらに創作化の進んだのが(ii)の形であるといえる。

資料三によれば、歌詞に二系統あり、△印を付した『古事談』系と☆印の『撰集抄』系に分かれる。(3)『撰集抄』

と(5)『硯破』が似るのは、他の部分の校合からいえることで当然と思われる。興味あるのは、(8)『三国伝記』の板本と平仮名本の関係である。板本は『古事談』系、平仮名本は『撰集抄』系であり、これは資料三〇その一〇〇その二〇〇共に明瞭である。本説話の『三国伝記』平仮名本書き出しは、あたかも板本からの翻字のように見えながら、その実、種々の資料を加えて、別のものへと一歩進むその傾向が資料三からも読み取り得るのである。それは、丁度『撰集抄』における性空上人説話が、種々の先行説話を受けて成立し、「松平文庫本型」↓「略本型」↓「室町時代物語(i)型」↓「(ii)型」↓「(iii)型」へと発展する姿を思わせるのである。

### 三 説話評論

『撰集抄』の性空上人説話は、二・三に述べて来た「硯破」「生身普賢」につづけて、最後に評論的な叙述を持つ。これは、『撰集抄』の他の巻々にもみられる形式ではあるが、しかし、『今昔物語集』の各話の最後に付加されるような簡単な感想・批評といったものではなく、とりあげた話に対する作者の意義づけとか、思想とかいった内容になるものが多い。単に、あのような事があった、このようなことがあったと述べる素朴な記述だけにとどまらず、自分の考えを表明するのである。作者特有のこの説話評論の存在は、いってみれば、早やそれだけ独創性が強くなったことになる。この説話評論のあり方も、説話の創作化・物語化へ踏み出す一出发点を示唆しているように思われる。

『撰集抄』巻六―第一〇話〔58〕「性空上人事」を通して、説話が次第に形を変えていく姿を見た。資料一「性空上人説話一覧」に示した「生れ・おいたち・入滅」といった伝記部分については、『撰集抄』と内容が重ならないため



触れなかったが、ⅠはⅣの諸逸話と共に、高僧伝型の説話として仏教説話伝承圏内に伝えられた。その意味では、Ⅱ「生身普賢」部分も、高僧の一説話として一緒に伝承されてもよさそうであるが、依拠した資料にこの話がなかったか、あるいは、普賢菩薩の化現した姿が「遊女」であったという点で縁起・高僧伝といった類へは伝承されず、一つには西行説話に吸収されて、一素材として、謡曲・長唄などへ形態を変えていったのであろう。

「すざりわり」の名前のみは、古く『和歌色葉』『八雲御抄』にもみられる。しかし、『八雲御抄』の場合も諸物語と共に『硯破』が記載されているこの部分は、私記<sup>金</sup>であり、ある男を主人公とする『今昔物語集』の硯破説話以外は、『撰集抄』以前には、依るべき確かな文献がない。資料二・三などからは、室町時代物語『硯破』は、やはり、『撰集抄』を踏まえて成長していったと考えたい。「硯破」「生身普賢」部分が有機的に結ばれ、「説話評論」が付加されて、一説話に構成されている『撰集抄』の説話を、『今昔物語集』などに所収の先行説話から眺めれば、『撰集抄』において既に虚構化へ踏み出す一步が感じられる。そして、さらに創作性をかち得て大きく物語化していく姿を『硯破』にみたのである。

△注▽

- (1) 巻・話は『撰集抄 校本篇』に従った。通し番号は、岩波文庫、古典文庫とも共通である。
- (2) 『撰集抄』における「説話評論」 山梨大学文学部研究報告第16号昭41・2 (『日本文学研究資料叢書説話文学』所収)。その他岩波文庫『撰集抄』の解説においても指摘しておられる。
- (3) 文化八年(一八一二)成立。『撰集抄』からの引用。本文は、『文献一覽』43によった。
- (4) 本文は、『文献一覽』44。必ずしも『撰集抄』のみを素材にしているとは言えない。若君の妹を設定する点では、『硯破』広島大学本に似る。小説『性空上人』に関しては、加美宏氏の論「山田美妙」(『日本の説話』6 近代 東京美術昭49)があ

る。

(5)

実践女子大学図書館蔵写本の分類は、『室町時代物語大成』巻七によった。その他の分類の方法も同書を参考にした。

(6)

名古屋大学文学部国文学研究室蔵『すゝりわり』一冊は、『室町時代物語大成』に記されていないが、調査の結果、次の如くである。表紙中央の題簽に「すゝりわり」〔内題も「すゝりわり」〕とあり、一面十行、墨付一九丁、漢字交り平仮名書きの写本である。巻末に「文久三年十二月二日写之 源忠直」とある。本文は、内閣文庫蔵本と同じで、両書は、漢字・仮名の使い方も同一である。ただし濁点は異なる。名大本は、一箇所以外濁点は見当たらない。数箇所、朱によりミセケチ記号を用いて誤字を訂正、その他、転写の際の誤りと思われるわずかな字を除いて内閣文庫蔵本とはほぼ同じである。内閣文庫蔵本の、もと絵があつたと思われるところは、所々空白部分があるということであるが、名大本にはない。ただし、その箇所は、本文全てで改行となつてゐる。

(7)

四系統比較の本文は、『文獻一覽』25・26・27・28に示した書に依つた。

(8)

(i)に所載される種々の奇特譚のうち、(1)乙護王が性空上人の袈裟を洗う話、(2)杉原紙一枚に法華經を書く話、(3)如来唄が比叡山にとどく話は、『太平記』巻一一(資料一23)に含まれる。(3)は『元亨釈書』巻二八、『法華經直談鈔』巻八末―二四にも所収される。

(9)

(ii)に所載の奇特譚のうち、(1)天人の天下つた桜の霊木によって如意輪觀音を作る話では、「あんちゃんきやうじやにめいして、によりんのさうをきさましむ そのたけ一尺五寸ん」(加藤本)とする。この如意輪觀音の「作者」と「丈」について記すのは、『元亨釈書』巻二八(および『元亨釈書』から引用した『天台叢標』五篇卷二)、『三国伝記』平仮名本卷一―一七とこの加藤本である。寸法を一尺六寸として記す『壺裏鈔』巻一七、あるいは丈については触れないが作者を「安鎮」とする『書写山縁起』などもある。

(2)書写山に至るまでの間にあちこちにて修行しているが、そのうちの一つ、諸集は、「背振山」(筑前・肥前に跨がる山)とするところ、「ひれふる山」(肥前)とするのは、加藤本と『三国伝記』平仮名本のみである。佐用姫伝説にて名高い「領巾振山」への変化がみられ、同時に、前の(1)と合わせ考えると、『硯破』加藤本と、『三国伝記』平仮名本の関連が窺える。

(10)

板本の本文は、主として中世の文学『三国伝記』(池上洵一校注)により、必要部分のみ寛永十四年板本を参照した。

(11) 平仮名本は、安藤直太郎氏蔵本。安藤直太郎  
名古屋三國伝記研究会編により翻刻中(古典文庫)。(注10)に示した如く、『硯破』加藤本との関連も典拠検討の際の一資料となり得る。

(12) 前掲論文(d)にも指摘されている。

(13) 日本古典文学大系謡曲「江口」の項の解説を参照した。なお、江戸長唄『時雨西行』『文献一覽』<sup>43)</sup>もこの系譜に立つ。

(14) (注11)の平仮名本翻刻の解説者渡辺信和氏も同書で触れておられる。また、名古屋三國伝記研究会の皆様からも種々ご意見を聞かせていただいた。

(15) 略本のうちでは、嵯峨本が最もよい本文と思われる、『硯破』との校合に適している。本文は、『文献一覽』14を用いた。

(16) 長唄『時雨西行』も、最後の繰り返し部分以外は『江口』と同文ある。

(17) 日本歌学大系巻三『八雲御抄』<sup>p.42</sup>に「私記 此以下本無之。後人私記歟。……」として、諸作品を列挙する中に「硯破」の名がみえる。

本稿校正中に、「奈良絵本『硯わり』と性空上人」(橋本直紀氏 千里山文学論集26号 昭57・3 関西大学大学院研究科院生協議会)の論があることを知った。

『三國伝記』平仮名本の調査をご快諾くださいました安藤直太郎氏、写本『硯破』ご所蔵の名古屋大学文学部国文学研究室、『扶桑隠逸伝』ご所蔵の名古屋大学図書館に厚く御礼申し上げます。

### 〔文献一覽〕

資料一「性空上人説話一覽」作成に用いた本文は次のものに依った。関連記事を載せるものは、( )に示した。叢書は、書名・校注者名を省略したものもある。

- 1 書写山旧記 朝野群載 所引 国史大系29上 吉川弘文館 (群書類従5輯をも参照した)
- 2 大日本国法華經驗記 日本思想大系『往生伝・法華驗記』 井上・大曾根校注 岩波書店

- |    |          |  |              |
|----|----------|--|--------------|
| 3  | 扶桑略記     | 国史大系12   | 吉川弘文館        |
| 4  | 今昔物語集    | 日本古典文学大系   |              |
| 5  | 古本説話集    | 朝日古典全書 川口久雄校注（影印本 勉誠社刊をも参照した）  |              |
|    | 〔打開集目録あと | 『打開集』中島悦次著 白帝社）  |              |
|    | （宝物集九冊本  | 古典文庫）  |              |
| 6  | 無名草子     | 新潮日本古典集成 桑原博史校注  |              |
| 7  | 世継物語     | 続群書類従 32 輯下  |              |
| 8  | 古事談      | 古典文庫   | 小林保治校注 現代思潮社 |
| 9  | 発心集      | 角川文庫 築瀬一雄訳注  |              |
|    | （閑居友     | 中世の文学 美濃部重克校注 三弥井書店）   |              |
| 10 | 日本高僧伝指示抄 | 大日本仏教全書 62 卷   |              |
| 11 | 日本高僧伝要文抄 | 大日本仏教全書 62 卷   |              |
| 12 | 十訓抄      | 古典文庫〔片仮名本〕 泉基博編  |              |
| 13 | 古今著聞集    | 日本古典文学大系   |              |
| 14 | 撰集抄      | 『撰集抄 校本篇』安田・梅野・野崎・河野・森瀬共著 笠間書院（影印本である『撰集抄―松平文庫本―』笠間書院も参照）、略本は『撰集抄（嵯峨本）』古典文庫によった。 |              |
| 15 | 私聚百因縁集   | 古典文庫（承応二年（一六五二）板本影印） 吉田幸一編   |              |
| 16 | 明匠略伝     | 群書類従 5 輯   |              |
| 17 | 沙石集      | 『慶長十年古活字本沙石集総索引』深井一郎編 勉誠社 十行本 p. 430 十二行本 p. 428                                 |              |
| 18 | 一遍上人語録   | 日本古典文学大系 83 仮名法語集  |              |
|    | （野守鏡     | 千種有房 群書類従 27 輯）  |              |
| 19 | 帝王編年記    | 国史大系   |              |
| 20 | 南都高僧伝    | 大日本仏教全書 64 卷   |              |

- [illegible]

- 40 本朝高僧伝  
41 絵詞誓願寺縁起  
42 天台霞標  
43 春波楼筆記  
43' 長唄 時雨西行  
44 性空上人  
45 蘆刈  
46 春のわかれ

- 大日本仏教全書 63 卷  
大日本仏教全書 83 卷  
大日本仏教全書 41・42  
日本随筆大成 1 卷  
杵屋勝三郎作曲、作者河竹其水、元治元年（一八六四）『日本歌謡集成』卷九 昭35（性空ではなく西行とする。）  
文芸倶楽部定期増刊第十卷第二号「ひと昔」明治37・1・1（一九〇四）  
谷崎潤一郎 昭7（一九三二）  
槇佐知子 偕成社 昭54（一九七九）